



つくばね
筑波嶺の峰より落つる男女の川

ふち
恋ぞ積りて淵となりぬる

百人一首十三番 陽成院

十七才で退位された陽成天皇（ようせい）が院となって後、光孝天皇の娘である綏子内親王（すいし）に送られたラブレターである。淵は合流して深くなった場所だから、恋も深くなったという訳である。高層ビルが建つ前までは、関東平野には富士山と筑波山の二つがくっきりと見え、京の都でも知れたる山であった。特に筑波山は男体山と女体山の二つの峰があつて、男女和合の象徴として民衆にも知られていた。それは、常陸風土記にもある様に、筑波の地では春秋の農閑期には歌垣（うたがき）の祭りが開かれ、そこで若い男女が結婚相手を探し、セックスをするという風習があつたからでもある。陽成院は綏子内親王を後に迎え、八十二才の天寿を全うされている。

令和三年九月十一日

大中臣正比呂 記す